9. 福井城跡（ふくいじょうあと）

（えちぜん鉄道地点 15－3～6 地区）

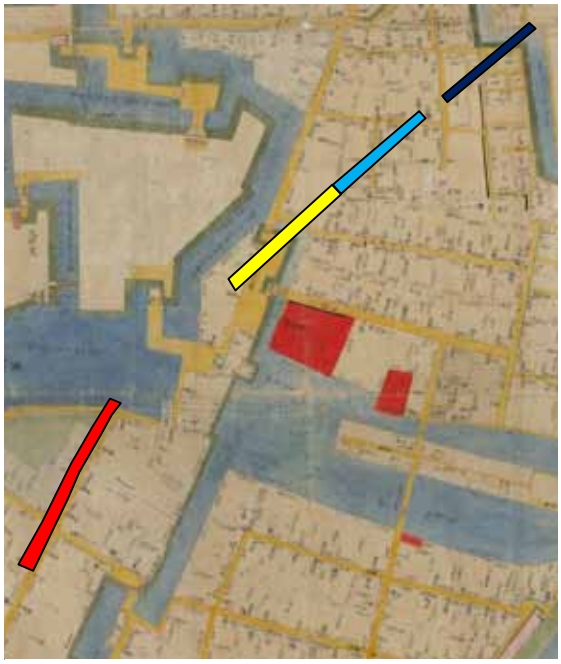
所 在 地：福井市大手 2 丁目・日之出 1 丁目
　　宝永 1 丁目 1 地係
調査原因：福井駅付近連続立体交差事業
　　（えちぜん鉄道地点）
調査期間：平成 27 年 11 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：5,180 ㎡（表面積）
時　　代：古墳～江戸

位置図（S＝1/50,000）

調査の概要　えちぜん鉄道の高架化工事に先立って福井城跡の発掘調査を行いました。この地域は、本丸の東方に位置し、江戸時代には中・下級武士の屋敷が並んでいました。ここでは、平成 28 年 4・5 月に調査した成果についても一部掲載しています。

調査区名	調査面積(表面積)	調査期間
15－3	1,280 ㎡	平成 27 年 11 月 2 日～平成 28 年 4 月 28 日
15－4	1,570 ㎡	平成 27 年 11 月 2 日～平成 28 年 5 月 31 日
15－5	1,030 ㎡	平成 27 年 12 月 1 日～平成 28 年 4 月 28 日
15－6	1,300 ㎡	平成 27 年 12 月 1 日～平成 28 年 5 月 31 日

第 1 図　全調査区の位置



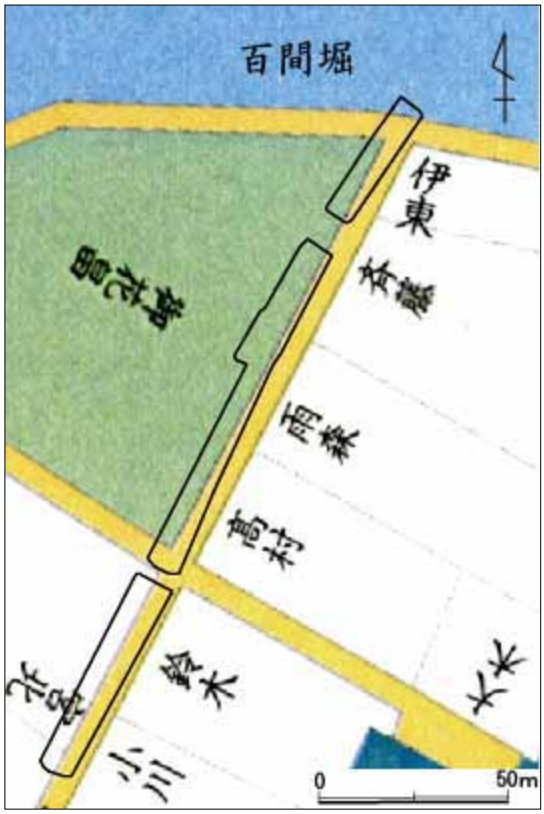
第 2 図　全調査区の位置
（文化 8 年(1811)の城下絵図と対照）

15-3 調査区の概要　15-3 調査区は、福井城下を描いた絵図によると、百間堀の南側に広がる通称「中之馬場（なかのばば）」の北東部に当たります。福井城築城から 60 年ほどは南北方向に延びる道路の両側に武家屋敷が建っていましたが、西側の武家屋敷は寛文九年（1669）の火災、いわゆる「寛文の大火」以後は、城の中心部に火災が燃え広がるのを防ぐ火除（ひよ）け地（左下絵図の御花畠）として、建物を建てなかったことが知られています。今回の調査では、主に福井城築城時の道路や井戸の他、多くはありませんが築城前の時代の建物跡も確認しました。

遺構　調査区の東側には、ほぼ絵図の通りに南北方向の道路が残っていました（写真１）。通常、福井城下の道路表面には、簡単に外れないくらいしっかりと砂利が敷き詰められています。今回の道路は福井城築城以降、明治・大正時代にかけて、傷むたびに砂利を敷き直すといった補修が行われ、道路として利用し続けられていました。道路の補修に関係すると考えられるものとして、砂利敷きの下で見つかった 10 枚以上の素焼きの皿を伏せて埋めた穴があり（写真２）、江戸時代の終わりに工事の無事を祈った祭事の跡の可能性があります。

調査区の西側は、明治時代に鉄道が開通して以降、関連施設の工事が行われたために残りが悪く、大火以前の武家屋敷については、井戸を１基確認した以外、不明と言わざるをえません。その他、部分的ですが福井城築城以前の建物跡を確認しました。

遺物　陶磁器・木製品・石製品などがありますが、出土量は多いとは言えません。珍しい木製品として将棋の駒（歩兵）が１枚出土しました。江戸時代以前の陶磁器や漆椀の他、時代が新しい鉄道に関する品もあり、駅名が書いてある汽車土瓶は大量に出土しました。



第 3 図　15－3 調査区の位置
（享和三年(1803)の絵図と対照）

写真 1　江戸時代の砂利敷道路

写真 2　素焼きの皿を納めています。

15－4 調査区の概要　15－4 調査区は、城下絵図によると東西に延びる堀を境にして、北に道路と武家屋敷が、南に幅広い道路と武家屋敷があったと想定できます。なお、この堀は寛文９年（1669）の火災、いわゆる「寛文の大火」後に新たに設けられたもので、それまではここにも武家屋敷があったことが、絵図の記載から分かります。

遺構　江戸時代の遺構としては、堀・石垣・道路・井戸・溝・土坑（ゴミ穴等）を確認しました。堀の幅は約 12ｍで、南北両側に石垣がありました。北側の石垣は２段分の積石が残っていましたが、南側の石垣は積石がすべて失われ、裏込め石と２列の胴木が残るだけでした（写真３・4)。裏込め石は、石垣の積石の固定と排水を兼ねて、石垣の奥に詰める石材のことです。この地点の石垣では全ての石材が足羽山で採れる凝灰岩（笏谷石）でした。胴木は石垣の沈下を防ぐために、積石の下に敷き並べる木材のことで、ここでは両端に切り欠きを作って隣の胴木同志を重ね合わせ、木栓を打ち込んで継いでいました（写真 6)。胴木の下には丸木を等間隔で並べている他、胴木の両側には固定のための杭を打ち込んでいました。一部では胴木と杭をカスガイで固定していました。胴木にはホゾや切欠きを複数持つものがあり､別の建築物に使われていたものを再利用していることが分かりました｡胴木の東端は、２本ずつの角材で胴木の上下を挟むなど、とくにしっかりとした造りとなっていて、石垣が直角に曲がる隅の部分が近いためではないかと考えています（写真 5)。北側の石垣には胴木が無く、裏込め石も南側に比べて少なかったです。

道路の砂利敷きは堀の北側で一部確認できましたが、南側では鉄道工事によって破壊され確認できませんでした。井戸は桶状の井戸側を持つものが、調査区南端部で確認できました（写真 10)。井戸側には穴の開いた底板がはまっていて、その下には竹管が更に下へと伸びていました。この井戸の横には、縁に笏谷石を列状に並べた土坑がありました（写真 7)。

中世から江戸時代初めの遺構としては、井戸・道路・溝・土坑（ゴミ穴等）を確認しました。

道路の砂利敷きは一部が残っていました。両側にはゆるくカーブする溝が走り、側溝にあたると考えています（写真 12)。井戸は調査区南端部で石積みのものが見つかりました（写真 11)。ほぼ完形の天目茶碗と素焼きの皿のほか漆椀が出土した土坑もありました（写真 8)。

古墳・奈良・平安時代の遺構としては、溝と土坑を確認しました（写真 13)。

遺物　出土したもので多くを占めるのは江戸時代の土器や陶磁器です。石製品・木製品・金属製品等が出土したほか、中世の陶磁器や古代の土器（須恵器・土師器）もありました。

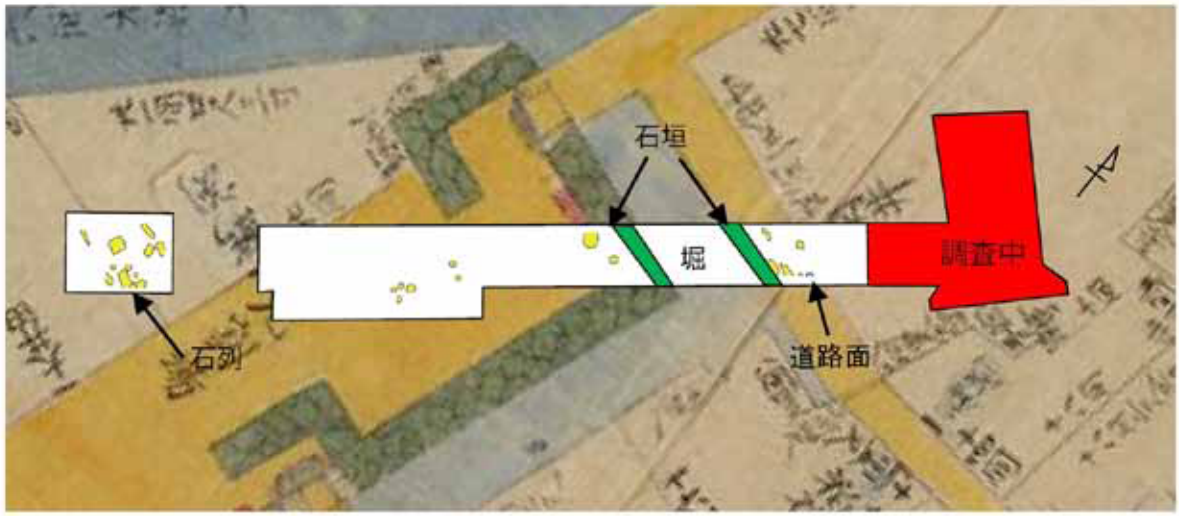
写真 3　石垣検出状況（南西から）

写真 4　南側石垣の胴木検出状況（南から）

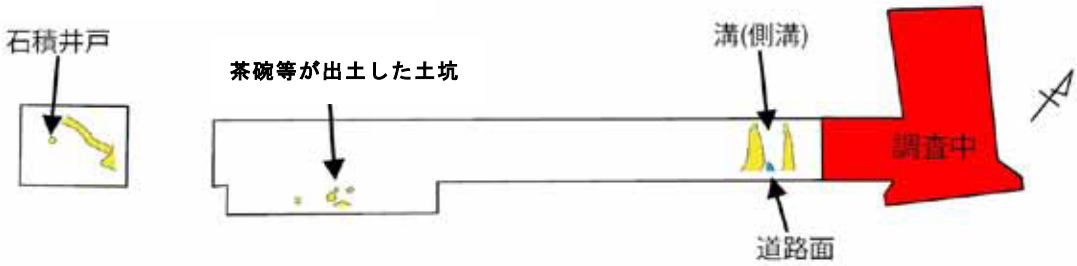
写真 5　胴木東端部の構造（西から）

写真 6　胴木の接合部（南西から）

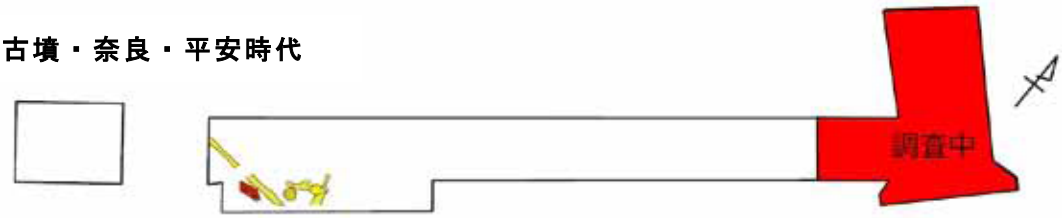
江戸時代（文化 8 年・1811 年の城下絵図と対照）



中世～江戸時代初め



古墳・奈良・平安時代



第 4 図　15－4 調査区の主な遺構

写真 7　縁に石列のある土坑（西から）

写真 8　茶碗等が出土した土坑（東から）

写真 9　調査区遠景（北東から）

写真 10　井戸（南西から）

写真 11　井戸(北西から)

写真 12　中世の道路側溝（北西から）

写真 13　古代の溝（西から）

15－5調査区の概要　15－5調査区は、城下絵図によると三ノ丸の北東の外郭に位置し、中級クラスの武家屋敷にあたります。

遺構　江戸時代の遺構としては、道路、井戸、土坑・廃棄土坑（ゴミ穴等)、池、溝を検出しました。調査区の北端では東西方向の道路に伴う南側の側溝を、中央付近では南北方向の道路に伴う両側の側溝を確認しました（写真14・15)。南北方向の道路の幅は4.5mで、道路表面の砂利敷きは確認できませんでしたが、過去に隣接地を調査した際には砂利敷きを確認しています。井戸は素掘りのものと下部に曲げ物等の木製の井戸側を持つものがあり、平面形が直径約1.5mの円形をしたものが多くを占めています（写真16)。池は平面形がＬ字状をしており、南西岸には笏谷石を積んでいました（写真17)。調査区南端付近では屋敷境を示す溝を検出しました。溝の両側には石積みが一部残っていました（写真18)。この溝は、古代からあった流路を近世に埋め立てて狭め、区画溝として利用したものです。

中世の遺構としては、井戸、溝、自然流路等を検出しました。特に自然流路では、16世紀後半頃の遺物が出土した土層から、２体分の頭蓋骨が出土しています（写真19）。

古墳～奈良・平安時代の遺構としては溝等を検出しました。

遺物　江戸時代の陶磁器、木製品等が大半を占めていて、中世の陶磁器、古代の土器（土師器・須恵器）も見られました。また、古墳時代以降の遺構確認面から約1.5m下の灰色粘土層では、縄文土器がまとまって出土した場所があります。

写真 14　東西道路（東から）

写真 15　南北道路（南から）

写真 16　井戸曲げ物出土状況（南東か

写真 17　池全景（北から）

写真 18　自然流路北岸石積み（北東から）

写真 19　自然流路内頭蓋骨出土状況（西から）

写真 20　調査区北半（南西から）

写真 21　土坑内遺物出土状況（南西から）

15－6 調査区の概要　15－6 調査区は、城下絵図によると中・下級武士の屋敷にあたると考えられます。

遺構　調査区内では、屋敷地 4 区画、砂利敷道路 2 条、屋敷地の境を示す区画溝 3 条を確認しました（第 5 図）。屋敷地では池状遺構 1 基、大形土坑 1 基の他、溝 4 条、井戸 6 基、土坑 15 基、ピット約 100 基等を検出しました。

砂利敷道路 01 は砂利敷面の下の造成土だけが残っていましたが、砂利敷道路 02 は砂利敷面が一部残っていました。

区画溝 03 は石組構造で、時期の異なるものが上下に重なっています。上層段階では、笏谷石を３段積み、下には杭と胴木で基礎が構築されています（写真 24）。時期は幕末から明治時代初めと考えられます。下層段階では、笏谷石１～２段分が残っており、時期は 18～19 世紀と推察されます（写真 25）。ともに東方の屋敷地へ向けて作られた暗渠施設が伴っています。

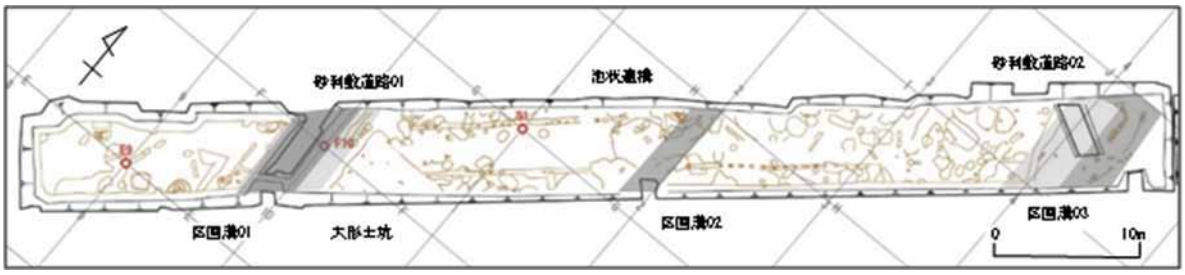
池状遺構は、区画溝 02 の西側に隣接しています。杭や横板材等を使った木組と笏谷石等の石組により、やや雑ですが方形状に構築されています（写真 26）。

大形土坑は、いわゆるゴミ穴であり、中の土には炭や木片等が多く含まれ、土器・陶磁器、木製品、石製品等が多量に廃棄された状況で出土しました（写真 27）。過去に隣接地を調査した際には一部で古代の遺構を確認しましたが、今回の調査区内ではこの時期の遺構は確認できませんでした。

遺物　遺物はコンテナ 65 箱分が出土しました。土器・陶磁器が中心で全体の７割を占め、土師質土器の皿、越前焼、瀬戸美濃焼、伊万里焼、唐津焼等からなります。木製品は 2 割強を占め、漆器椀、曲物、折敷、下駄等が出土しました。石製品は 1 割弱を占め、瓦類、粉挽臼、行火、盤等が出土しました。時期は、大半が幕末から明治時代初めと考えられます。

まとめ　狭い範囲ですが遺構は比較的良く残っており、調査区全体で多くの遺構と遺物を検出しました。各屋敷地では井戸や土坑・ピット等の分布状況から屋敷地内の構造を推察でき、区画溝等では 2 時期のものが重なっていることを確認しました。特に大形土坑では、土器・陶磁器等の遺物が多量に出土しており、福井城の廃絶期に一括して廃棄されたと考えられます。

（青木隆佳・中原義史・野路昌嗣・田中勝之）



第 5 図　15－6 調査区平面略図

写真 22　調査区全景（南西から）

写真 23　調査区全景（北東から）

写真 24　区画溝 03 上層段階（北東から）

写真 25　区画溝 03 下層段階（北から）

写真 26　池状遺構（北西から）

写真 27　大型土坑遺物出土状況（北から）